千葉市　荒屋敷西遺跡・菱名台遺跡

2005

千葉市教育委員会・財団法人千葉市教育振興財団

— 千葉市 —

荒屋敷西遺跡
菱名台遺跡

2005

千葉市教育委員会
財団法人 千葉市教育振興財団

－ 千葉市 －

荒屋敷西遺跡
菱名台遺跡

2005

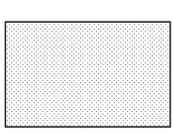
千葉市教育委員会
財団法人 千葉市教育振興財団

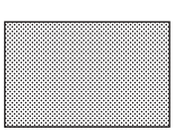
例　言

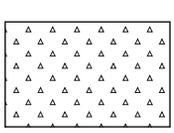
１．本書は、下記の２遺跡の発掘調査報告書である。
荒屋敷西遺跡　千葉市若葉区貝塚町828-１番地他（遺跡番号：若葉区78）
菱名台遺跡　　千葉市緑区平山町1921-16他　　（遺跡番号：緑区68）
２．調査は、下記の事業に伴い、千葉市教育委員会生涯学習部文化課の指導のもと、財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
荒屋敷西遺跡　公共下水道整備事業
菱名台遺跡　　市道川戸町76号線整備事業
３．発掘調査及び整理作業の期間、及び担当者・調査面積は以下の通りである。
荒屋敷西遺跡
本 調 査　平成15年３月17日～同年３月27日　　担 当 者：簗瀬裕一
調査面積　24㎡
平成15年４月１日～同年４月25日　　担 当 者：白根義久・古谷渉
調査面積：21㎡
菱名台遺跡
本 調 査　平成15年７月16日～同年９月12日　　担 当 者：飛田正美・塚原勇人
調査面積：310㎡
整理作業平成16年５月１日～同年５月31日　　担 当 者：長原亘
４．本書の編集及び執筆は、長原が行った。
５．耳環の保存処理はＪＦＥテクノリサーチ株式会社に委託した。
６．遺構の写真撮影は発掘調査担当者、遺物は長原が行い、デジタルカメラで撮影したものを使用している。
７．出土資料及び調査記録などは、千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
８．発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々から御教示・御協力いただいた。記して謝意にかえさせていただきたい。千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉市教育委員会生涯学習部文化課（順不同・敬称略）

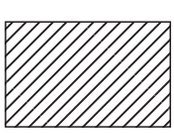
凡　例

１．図中では、以下のような略号を使用している。
土壙：「壙」、古墳：「古」、古墳周溝：「周」
２．遺構図中の標高は海抜高、方位は真北を示している。
３．遺構実測図の縮尺は、以下の通りである。
１/150・１/60：古墳、１/30：箱式石棺、１/40：土壙
１/２：耳環、１/３：土器・土器片・土製品、２/３：石器
なお、図中スケールに適宜縮尺を記載している。
４．遺構の番号は、調査段階と合致する。菱名台遺跡の古墳は過去の調査成果からの継続番号である。
５．第１図は、国土地理院発行「蘇我」（Ｓ＝１/25,000）と財団法人日本地図センター発行「第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖-複製版-677（千葉縣下總千葉郡千葉市街・明治15年測図）」を元図として使用している。
第５図は、国土地理院発行「千葉東部」（Ｓ＝１/25,000）と財団法人日本地図センター発行「第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖-複製版-676（千葉縣下總千葉郡野田村及平山村・明治15年測図）」を元図として使用している。
第２・６図は、千葉市都市基本図（Ｓ＝１/2,500）をＳ＝１/500に部分拡大したものを元図として使用している。
６．図版中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。


石材断面


遺体位置推定部分


貝　　層


地　　山

目　　次

例言・凡例・目次
Ⅰ　荒屋敷西遺跡の調査
　1　調査に至る経緯……1
　2　遺跡の位置と環境……1
　3　調査の方法と基本層序……3
　4　検出された遺構と遺物……6
　　a　縄文時代
　　土壙……6
　　b　時期不明
　　ピット……7
　　溝状遺構……7
　　c　遺物の出土傾向……8
　5　小結……8
Ⅱ　菱名台遺跡の調査
　1　調査に至る経緯……9
　2　遺跡の位置と環境……9
　3　調査の方法と基本層序……12
　4　検出された遺構と遺物
　　a　古墳時代
　　古墳……12
　5　小結……18
Ⅲ　まとめ……18

挿図目次

第１図　荒屋敷西遺跡周辺遺跡分布図……2
第２図　荒屋敷西遺跡調査区周辺地形図……4
第３図　荒屋敷西遺跡遺構配置図……5
第４図　荒屋敷西遺跡１号土壙……6
第５図　荒屋敷西遺跡出土遺物……7
第６図　菱名台遺跡周辺遺跡分布図 …… 10
第７図　菱名台遺跡調査区周辺地形図……11
第８図　菱名台遺跡遺構配置図 …… 13
第９図　菱名台遺跡２号墳平面図・土層断面図 … 14
第10図　菱名台遺跡２号墳主体部石室展開図 …… 15
第11図　菱名台遺跡２号墳主体部平面図・土層断面図 …… 16
第12図　菱名台遺跡２号墳主体部遺物出土状況及び天井石残存・崩落状況平面図及び出土遺物…17

表目次

第１表　荒屋敷西遺跡周辺遺跡一覧 …… 3
第２表　荒屋敷西遺跡出土遺物時期別一覧 …… 8
第３表　菱名台遺跡周辺遺跡一覧 …… 11

写真目次

図版１　荒屋敷西遺跡　調査各区遺構検出状況（１～９区　※５区はなし）
図版２　荒屋敷西遺跡　１号土壙・調査各区遺構検出状況（９～16区　※13区はなし）
図版３　菱名台遺跡　調査前全景・２号墳主体部検出状況①
図版４　菱名台遺跡　２号墳主体部検出状況②・完掘状況
図版５　荒屋敷西遺跡・菱名台遺跡出土遺物

Ⅰ　荒屋敷西遺跡の調査

１　調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、千葉市による公共下水道工事整備事業（下水道管敷設・貝塚14-１工区）に伴い、平成14年度末から平成15年度当初にかけて継続的に実施された。平成15年１月16日付で千葉市長から千葉市若葉区貝塚町828-１番地の事業予定地内について千葉市教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書（14千下南工第473号）が提出された。市教育委員会文化課（以下、文化課と表記）による現地踏査等の結果、照会地が荒屋敷西遺跡として周知される範囲に含まれることを確認の上、「遺跡の所在する旨」、平成15年１月16日付の14千教文（埋）第185号で回答した。これを受けて文化課と千葉市下水道局建設部南部下水道建設課との間で遺跡の取り扱いについて協議した結果、照会地が90㎡と面積が狭小なことから当初より全面表土除去を前提とし、埋蔵文化財への影響が及ぶと考えられる範囲の記録保存を目的とする確認・本調査によって対応することとなった。この結果、平成15年３月17日～３月27日の当初に確認調査を実施し、工事による影響が想定される範囲45㎡に関して本調査を実施することとなった。調査地が生活道路として利用されていたことから全域を一度で調査できる状況ではなかったので、３月27日までの間に24㎡分の範囲の調査を実施し、平成15年度に継続調査として残りの21㎡を平成15年４月１日～４月25日の期間、千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターに委託して発掘調査を実施することとなった。　　（文化課）

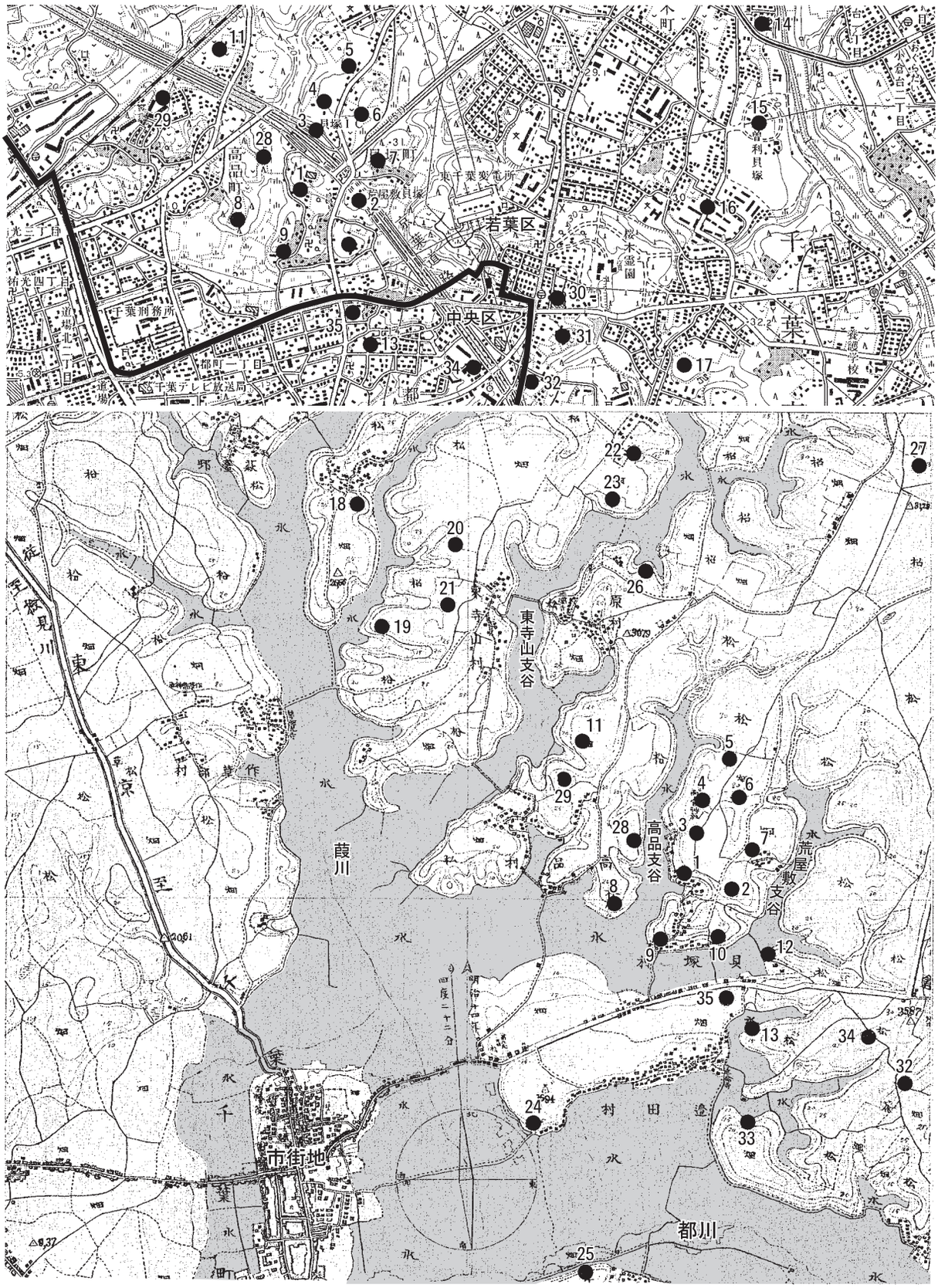
２　遺跡の位置と環境

千葉市は、房総半島の北半に広がる下総台地の南西部に位置する。市域の大部分が下総台地で占められており、各時代の多くの遺跡が台地上に展開している。大規模な河川は無いものの、市域北部には印旛沼に注ぐ鹿島川があり、東京湾に流入する村田川・都川・浜野川などとこれらに合流する生実川・支川都川・葭川・坂月川などの支流が樹枝状に展開し、東京湾岸の河口付近に小規模な沖積平野・海岸低地を形成している。なお、河川の流れが東京湾側と印旛沼側とに分かれるのは、市北西部の花島町域から南東部の土気町にかけて延びる分水界が市域に存在するためである。

本遺跡は、京葉自動車道・貝塚トンネル上の荒屋敷貝塚から西へ100m程離れており、都川と葭川の分岐点から北東約２㎞程の位置、葭川によって開折された谷津開口部と都川北岸台地上となる。台地は標高約28～30mを測り、西側に通称「高品支谷」、東側の「荒屋敷支谷」とに挟まれて南側に張りだす形状をなす。

遺跡周辺は、地名にもあるとおり貝塚が密集していることで有名な地域であり、東側に国指定史跡の荒屋敷貝塚、北側に草刈場南貝塚・草刈場貝塚、南東約300m程に台門貝塚、北東約300m程に荒屋敷北貝塚などが群在している（貝塚町貝塚群）。これらの貝塚群周辺は、京葉自動車道の建設や宅地開発も行われているが、第１図上の地図にあるように、周囲の台地に比べ旧地形の残りがよい地域であるといえよう。

第１図に記載した遺跡は縄文時代の遺跡ばかりで、近隣の貝塚と本遺跡の特徴となる前期の遺跡を



第１図　荒屋敷西遺跡周辺遺跡分布図（S=1/25,000）

主に抽出している。前期の遺跡は市域に多く存在するが、その中でも比較的集中する地域でもある。

周辺の調査事例・貝塚形態は、第１表にあるとおりである。

今回の調査地点は、平成14年９月に国庫補助事業による確認調査を実施した地点に隣接しており、当遺跡の調査としては二度目の調査となる。

第１表　荒屋敷西遺跡周辺遺跡一覧

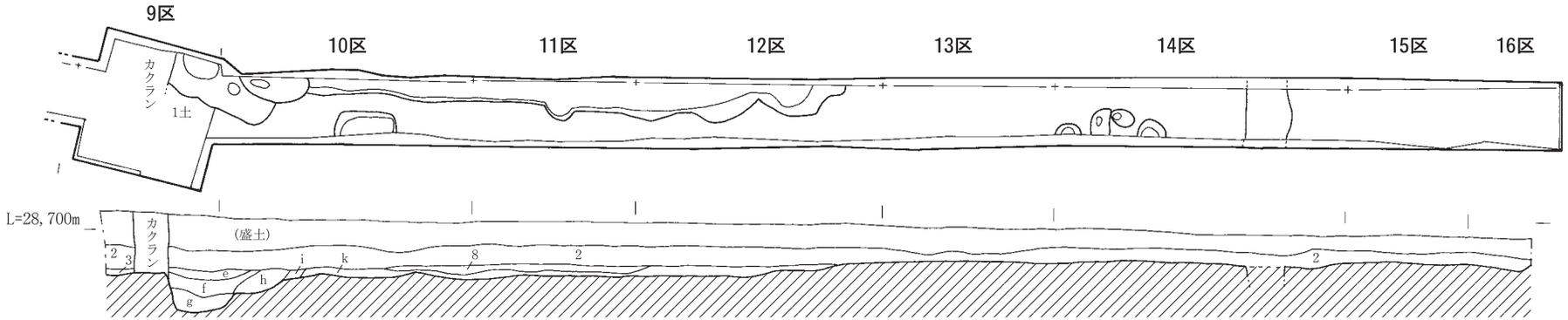
№.	遺　跡　名	遺跡№.	時　　代(時期)	貝塚形態	調　査　年　度
1	荒屋敷西遺跡	若葉区78	縄文(前・中・後)	地点貝塚	H14・15
2	荒屋敷貝塚	若葉区77	縄文(中・後)	馬蹄形貝塚	S52・H9・10　国指定史跡
3	荒屋敷北貝塚	若葉区79	縄文(前・中)	地点貝塚	
4	向ノ内遺跡	若葉区64	縄文(中・後)	地点貝塚	草刈馬南貝塚として調査
5	草刈場貝塚	若葉区61	縄文(中・後・晩)	馬蹄形貝塚	S2
6	草刈場北遺跡	若葉区62	縄文(前・中・後)		H4・5
7	貝殻後遺跡	若葉区63	縄文(中)	地点貝塚	
8	貝堤遺跡	若葉区55	縄文(早・前・中・後)	地点貝塚	
9	干場遺跡	若葉区80	縄文(早・前・後)		
10	台門貝塚	若葉区76	縄文(中・後・晩)	馬蹄形貝塚	
11	宮腰遺跡	若葉区44	縄文(中・後)	貝層	
12	車坂遺跡	若葉区82	縄文(前)		S47
13	木戸場遺跡	中央区13	縄文(早・前)	地点貝塚	
14	京願台遺跡	若葉区109	縄文(中)		S59
15	加曽利貝塚	若葉区104	縄文(早・前・中・後・晩)	馬蹄形貝塚	S59・H7　国指定史跡
16	加曽利貝塚隣接地遺跡	若葉区105	縄文(中・後)	地点貝塚	S60・61・H1
17	花輪貝塚	若葉区130	縄文(中・後)	馬蹄形貝塚	H15
18	小満遺跡	若葉区15	縄文(中・後)		H11
19	海老遺跡	若葉区19	縄文(早・前・中・後)	地点貝塚	S58・H3・4・6～8
20	東寺山貝塚	若葉区16	縄文(中・後)	馬蹄形貝塚	県指定史跡
21	稲毛台東遺跡	若葉区18	縄文(中)	地点貝塚	S48
22	廿五里北貝塚	若葉区1	縄文(中・後)	馬蹄形貝塚	S56・57
23	廿五里遺跡	若葉区28	縄文(中・後)	馬蹄形貝塚	S39・47・57・58・H8・9
24	宝導寺台遺跡	中央区7	縄文(前・中)		S34
25	矢作貝塚	中央区19	縄文(早・前・中・後)	馬蹄形貝塚	S12・22・25・55・H3
26	原遺跡	若葉区40	縄文(早・前・中・後)		S63
27	北原遺跡	若葉区50	縄文(早・前・中)		
28	東田遺跡	若葉区56	縄文(中・後・晩)		S63・H8
29	高品城跡	若葉区57	縄文(早・前・中・後)		H2・6・7
30	上人塚遺跡	若葉区106	縄文(前)		
31	立木遺跡	若葉区129	縄文(前)		
32	聖人塚遺跡	若葉区131	縄文(前)		H6　兼坂東遺跡として調査
33	向ノ台遺跡	中央区8	縄文(早・前)	地点貝塚	S21
34	都町・山王遺跡	中央区9	縄文(早・前・中・後)		S41・47・H1・3・6・7
35	貝塚向遺跡	中央区11	縄文(前)		

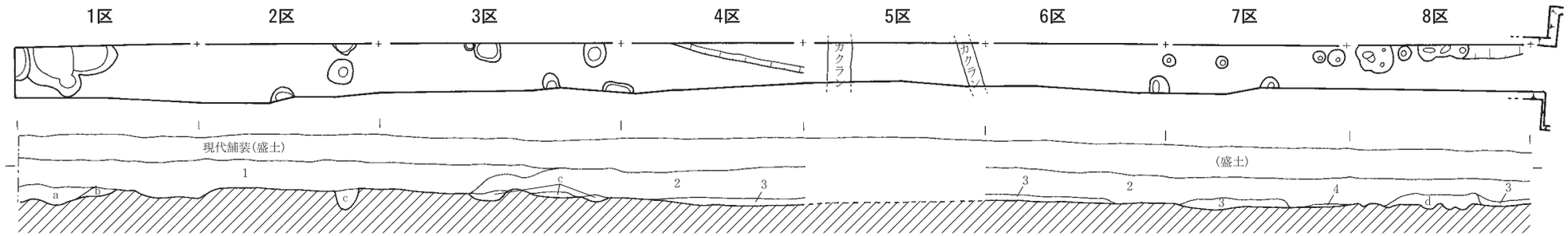
３　調査の方法と基本層序

今回の調査地点は生活道路として利用されており、対象面積が90㎡と狭小で幅が１m強しかなかったことから重機による表土除去の後に鉄板で蓋をし、鉄板１枚の長辺約３m前後を基準として№.１～16の小区割を設定して各小区毎に調査を行った。№.１～８区を平成14年度、№.９～16区を平成15年度に実施した。調査に使用した標高は、調査付近のベンチマーク（BM）の29.1mを基準としているが、正確な値ではない。位置関係は公共座標系ではなく、事業地内にあった電柱や道路境界杭等の地図上にプロットされる公共物を基準としている。なお、平成14年度の国庫補助事業に伴う市内遺跡の調査時に設定した調査区との位置関係も、千葉市基本図（S＝１/500）の公共物を基準に整合させた。

基本層序は、整地層、Ⅰ層（7.5YR3/4暗褐色土層：ローム粒・炭・焼土粒を少々含む）。Ⅱ層（7.5YR3/4暗褐色土層：ロームブロックを少々含み、貝殻（アサリ等の二枚貝主体）を多く含む）。Ⅲ層（7.5YR4/3褐色土層：ロームブロック主体、しまりやや有り）。Ⅳ層（7.5YR3/4暗褐色土層：ローム主体、しまり有り）。Ⅴ層（7.5YR4/3褐色土層：ローム主体、しまり有り）。Ⅵ層（ソフトロー

第２図　荒屋敷西遺跡調査区周辺地形図（S=1/500）





1. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム粒、灰、焼土粒含む。しまり良。
2. 7.5YR3/2 黒褐色 ロームブロックを少し含む。貝ガラ(二枚目・アサリ等)をやや多く含む。
3. 7.5YR4/3 褐 色 ロームブロックを主とし。しまりやや良。
4. 7.5YR3/4 暗褐色 ローム主体で。しまりあり。

a. 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロックを少し含む。
b. 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロックをやや多く含む。
c. 7.5YR3/4 暗褐色 ロームブロックをやや多く含む。
d. 7.5YR3/2 黒褐色 ロームブロック(φ0.5～1cm)20%
黒色土がブロック(φ2cm)にまとまい。やや硬い。
道跡の硬化面か？
e. 7.5YR4/3 褐 色 ロームブロック多い(30%)
f. 7.5YR3/3 暗褐色 ロームブロック(5～10cm)主体。貝ブロックを含む。
g. 7.5YR3/2 黒褐色 ロームブロック(φ2cm)含む。(30%)
h. 7.5YR3/2 黒褐色 貝尺。
i. 7.5YR3/2 黒褐色 ロームブロック多い。

j. 7.5YR3/3 暗褐色 ロームブロック(φ1cm)10%
k. 7.5YR4/3 褐 色 ローム主体でしまりあり。

0 (S=1/100) 10m

第３図 荒屋敷西遺跡遺構配置図

ム層）である。遺構は、ａ～ｈ層まで観察されている（詳細は第２図に記載）。なお、ハードローム層までの掘削は実施していないので上面までの深さは不明である。

４　検出された遺構と遺物

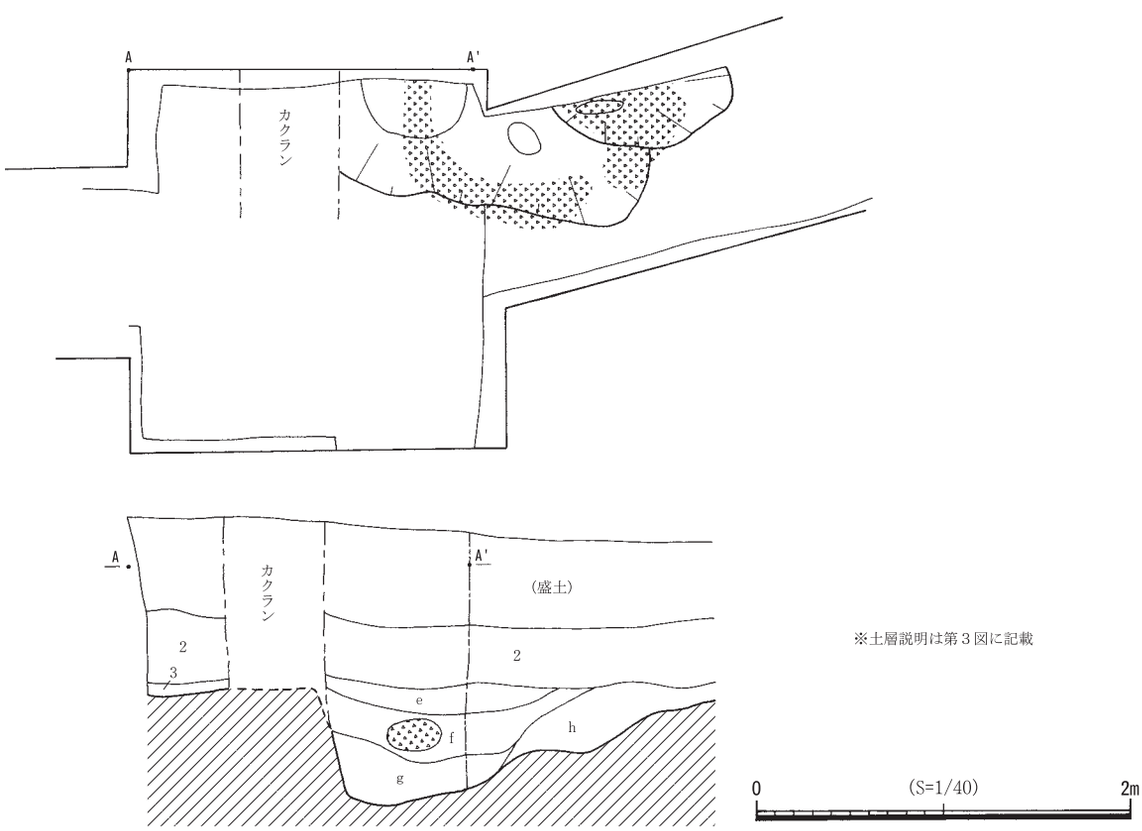
検出された遺構は、縄文時代の土壙１基と時期不明のピット23基と溝状遺構１条である。

ａ　縄文時代

土壙

この土壙は、９区と10区にまたがって検出されたが、調査区の状況上、東側半分は未調査である。遺構は貝を多く包含するⅡ層の下面から切り込まれている。Ⅱ層は、平成14年度国庫補助事業調査区で広域に確認された縄文時代の包含層と同一層と考えられる。覆土中にも貝を多く含んでおり、ほぼ純貝の貝ブロックが検出された。出土遺物は、前期・中期・加曽利Ｅ式・後期堀之内式の土器が出土している。平面は不整円形で底面の形状から３基の土壙が重複し、出土遺物から時期差のある土壙の重複の結果である可能性が高く、ｅ～ｇ層が最も新しく、ｈ層とｉ層が古いものであろう。

１・10区の土壙状の凹みは浅く、遺物が出土していないので時期も不明である。



第４図　荒屋敷西遺跡　１号土壙

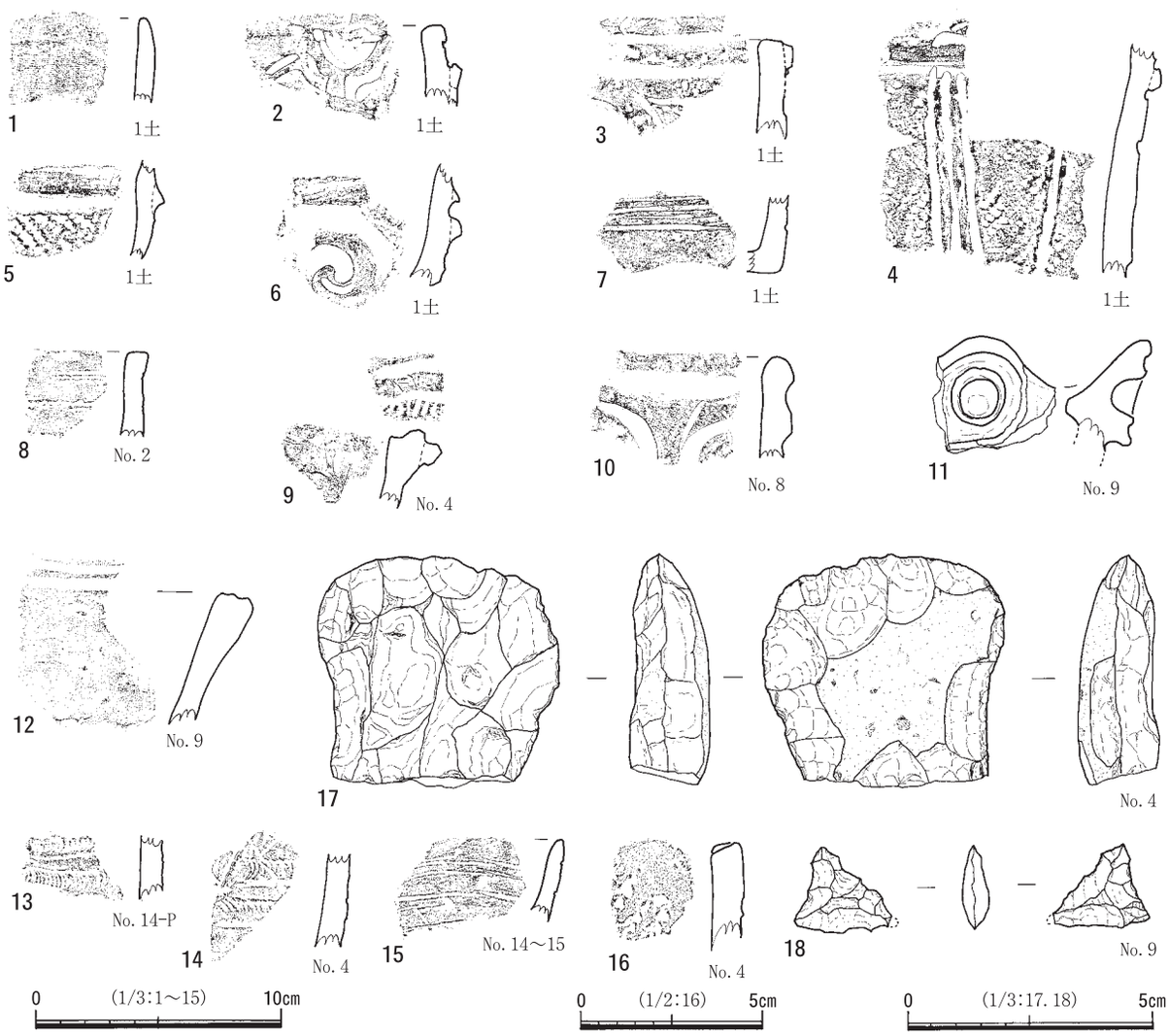
b　時期不明

ピット

平面図的には２区に３基、３区に５基、６・７区に６基、８区に５基、14区に４基の合計23基が確認できるが、柱穴と判断できるものはない。２・３区のピットはややまとまっており、土層的にも近似したもののようなので、何らかの遺構に伴う柱穴の可能性も考えられよう。出土遺物は、縄文土器片が僅かにあるが、時期の比定には至らなかった。

溝状遺構

４区と10～12区の溝状遺構は底面の硬化具合等から同一の遺構である可能性がある。しかし、断面図ではｊ・ｋ層がｉ層に切られるように表現されていることから古い遺構であると判断できるが、硬化具合から道状遺構の可能性が高く、中・近世頃の所産とする方が妥当とも感じられる。断面図の関係を優先させるか遺構の検出状況を経験則的に捉えるかによって形成時期に差違が生ずることから時期不明の遺構として扱うこととした。



第５図　荒屋敷西遺跡出土遺物

c　遺物の出土傾向

出土した遺物は、総点数で144破片しかない。完形品は９区で出土したミニチュア石匙のみで他は全て破片である。第２表にもあるとおり、型式不明の縄文土器片以外では、加曽利Ｅ式期のものが最多で、前期の土器が詳細不明も含めてそれに続いている。前期の土器片で型式がわかったのは、浮島式と諸磯式のものばかりであった。各型式毎の出土状況をみると極端に地区が偏る傾向はみられない。遺構の多くはⅡ層内もしくは下面からの掘り込まれ、Ⅱ層の形成時期によって時期的な解釈が変わる点が問題となる。上部が現代の盛土なので、より新しい遺構（ピット）も含まれる可能性があるが、縄文土器は混土貝層であるⅡ層内に含まれ、古代の遺物はⅠ層内に含まれていたと思われる。

第２表　荒屋敷西遺跡出土遺物時期別一覧

調査区名	遺構名	前期			中期		後期	型式不明	古墳・奈良・平安		石器・土製品			合計	備考
		(前期)	浮島	諸磯	阿玉台	加曽利E	加曽利B		土師器	須恵器	土器片錘	打製石斧	その他		
№1														0	
№2		3	1			3		7	1					15	
№3		1				1		4						6	
№4						4			1		1	1		7	
№5														0	
№6			1	2		1			1					5	
№7		1	1			1		3						6	
№8				1	1	2	1	3						8	
№9			1			2	1	1					1	6	
№10		1		2		1		10						14	
№11		6	3			2		1						12	
№12			1		1			2						4	
№13														0	
№14			1			3	1	5						10	
№15															
№16															
	土壙１	4				21		14						39	№9～10区
	ピット					7	1	4						12	№14～16区
合計		16	9	5	2	48	4	54	3	0	1	1	1	144	

５　小　結

今回の調査は、調査範囲が狭小であったことなどから目立った成果をあげることはできなかった。ここでは、前回の調査（平成14年度確認調査）成果を踏まえて若干の整理をしておくことにする。

今回の調査で出土した遺物の構成は、前回調査での成果とほぼ同様の内容であった。ただし、前期の関山・黒浜式の遺物が皆無であり、潜在する遺構数が少ないためか、これらの時期の遺構・貝層が今回の調査範囲にまで広がっていない等の可能性も考えられよう。また、古代の遺物の出土も少なく、№２・４・６区といった北寄りの地区で少量出土した程度だが、前回調査の成果報告で指摘したように、貝層の範囲外に展開している遺構がより北側へ拡散している可能性を示唆していると考えられる。

Ⅱ層の混貝土層の存在は、前回の調査成果で示した貝層分布予想範囲がさらに北側にのびることを示唆しており、そのⅡ層を切り込んで形成されているように見受けられるⅠ層が貝層形成後の古代以降に形成された堆積層で、古墳時代以降の遺構・遺物が包含される層であるとの想定も過言ではないと思われる。また、古墳時代以降の遺構群は、前回調査では貝層の範囲外でしか確認できなかったが、その分布範囲が環状の貝層範囲の内外に展開し、今回の調査のように貝層を掘り込むような関係があることを踏まえると貝層範囲内にも古代の遺構が展開していると考える方が自然であろう。

なお、土壙出土の貝層の分析は行えなかったが、機会をあらためて報告できればと考えている。

Ⅱ　菱名台遺跡の調査

１　調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、千葉市による道路新設改良事業（川戸町76号線）に伴い発掘調査が実施された。平成14年10月21日付で千葉市長から千葉市緑区平山町1921-13他の事業予定地内について千葉市教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書（14千建道建第247号-６）が提出された。市教育委員会文化課による現地踏査等の結果、照会地が菱名台遺跡として周知される範囲に含まれることを確認の上、「遺跡の所在する旨」、平成15年５月17日付の14千教文（埋）第142号で回答した。これを受けて文化課と千葉市建設局道路部道路建設課との間で遺跡の取り扱いについて協議した結果、照会地600㎡の内、工事による影響を受けると判断された310㎡を確認調査の実施後に遺構が確認された部分に関して本調査による記録保存の措置を講ずることとなった。この措置を受け、平成15年７月16日～９月12日に千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターに委託して発掘調査を実施することとなった。（文化課）

２　遺跡の位置と環境

千葉市は、房総半島の北半に広がる下総台地の南西部に位置する。市域の大部分が下総台地で占められており、各時代の多くの遺跡が台地上に展開している。大規模な河川はないものの、市域北部には印旛沼に注ぐ鹿島川があり、東京湾に流入する村田川・都川・浜野川などとこれらに合流する生実川・支川都川・葭川・坂月川などの支流が樹枝状に展開し、東京湾岸の河口付近に小規模な沖積平野・海岸低地を形成している。なお、河川の流れが東京湾側と印旛沼側とに分かれるのは、市北西部の花島町域から南東部の土気町にかけて延びる分水界が市域に存在するためである。

本遺跡は、それらの河川の内、都川と合流する支川都川上流域の台地上に立地する。最寄り駅であるJR外房線鎌取駅から北北西に1.5㎞程の距離となる。

支川都川は現在のおゆみ野地区に源を発し、平山町域で平山町谷地奥を水源とする支流と合流、京葉道路下の丹後堰付近で都川本流と合流している。その支川都川（通称：辺田支谷）と平山町谷地（通称：平山支谷）が合流する地点を北東側に望む標高約36mを測る台地上平坦部に遺跡は立地する。　遺跡周辺の台地上には支川都川支流域を基盤とした首長達の墓と考えられる古墳群が多く形成されており、本遺跡のある台地上では菱名台古墳群(2)・菱名台南古墳群(4)、小支谷を挟んだ北東に菱名古墳群(3)等の小規模な円墳で構成された古墳群が群在している。

平山支谷の奥部には、前方後円墳を含む塚原古墳群と中原古墳群といった中規模の古墳群がある。中原古墳群は、1960年(昭和35年）早稲田大学により調査が実施され、前方後円墳３基を含む計９基の後期群集墳であることが確認されている。この内、Ⅰ～Ⅴ号墳で調査が実施され、鉄鏃・鉄刀・刀子・耳環・鉄鎌などの鉄製品が主体部から出土した。主体部は、木棺直葬と軟質砂岩製の横穴式石室が検出されている。造営年代は６～７世紀と推定され、都川支流域を領域とした古墳時代後半から終

第６図　菱名台遺跡周辺遺跡分布図(S=1/25,000)

第７図　菱名台遺跡調査区周辺地形図（S=1/1,000）

第３表　菱名台遺跡周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	遺跡No.	調査年度	備　　考
1	菱名台遺跡	緑区68	H2・3・4	
2	菱名台古墳群	緑区78	S60	
3	菱名台墳群	緑区79		
4	菱名台南古墳群	緑区77	S60・H2・4	
5	吾妻遺跡	緑区75		
6	吾妻古墳	緑区80		
7	平山台畑古墳群	緑区81		
8	谷津町古墳	緑区86		
9	志み古墳	緑区92		
10	新山遺跡	緑区93	S52	
11	平山古墳	緑区90	S52	
12	平山塚原古墳群	緑区95		前方後円墳含む
13	中原古墳群	緑区97	S34	前方後円墳含む
14	大野羅古墳群	緑区113		方墳含む
15	立堀遺跡	緑区106		
16	辺田向古墳	緑区107		
17	清水作遺跡	緑区110	S52	
18	物見塚古墳	緑区101		
19	庚塚古墳群	中央区79		
20	池田遺跡	中央区80	S56	池田古墳群
21	庚塚古墳	中央区92		
22	ウツギ遺跡	中央区97	S60	方墳

No.	遺跡名	遺跡No.	調査年度	備　　考
23	郷西遺跡	中央区90		
24	仁戸名遺跡	中央区82	S47・59・H3～5	前方後円墳含む
25	中峠古墳	中央区81		
26	大作台古墳群	中央区100		
27	清水台古墳	中央区101		
28	榎作古墳	中央区104	S54・55	
29	大道遺跡	中央区112	S56・57・H4～6	
30	兼塚古墳群	中央区128		方墳含む
31	有吉遺跡	緑区9	S49～51・53・55・63	
32	高沢古墳群	緑区24	S57	
33	生浜古墳群	中央区134	S50・51	
34	南二重堀遺跡	緑区10	S54・55	
35	鎌取遺跡	緑区36		
36	鎌取古墳	緑区7		
a	有吉遺跡	緑区9	これらの遺跡は、古墳時代後期の集落が検出された遺跡であり、1～36の古墳群を造営した首長との関係を見出すことができる可能性のある遺跡である。特に高沢遺跡(b)・榎作遺跡(e)・仁戸名遺跡(f)で検出された集落との関係は検討を要する課題の一つといえよう。	
b	高沢遺跡	緑区1		
c	南二重堀遺跡	緑区10		
d	種ヶ谷津遺跡	中央区130		
e	榎作遺跡	中央区99		
f	仁戸名遺跡	中央区82		
g	越川戸遺跡	緑区76		
h	新山遺跡	緑区93		

末期にかけての中心的な地域首長の古墳群と考えられている。本遺跡周辺の地形図(第６図)からは、支流から派生する小支谷奥部縁辺部や支流を望む台地縁辺部に古墳群が造営されていることが理解できる。仁戸名遺跡(24)・池田古墳群(20)、現在のおゆみ野地区内の高沢古墳群(32)・南二重堀遺跡(34)などは、村田川に流入する小河川に開折された支谷縁辺部の造営されている。これらの分布傾向から古墳造営地の選択が各河川の各小支谷毎のまとまりとして見出すことができそうである。

本遺跡は、平成２・３・４年度に調査が実施されている。平成２年度はＡ・Ｂ調査区（菱名遺跡として調査）と別地点の３箇所の確認調査を実施した。Ａ調査区で確認された溝状遺構等は平成３年度に本調査され、２箇所の石核・剥片を中心とした石器集中区域と溝状遺構・土壙などが検出された。別地点の調査でも古墳の周溝が検出され、平成４年度に本調査を実施した結果、鉄製直刀・鉄鏃・耳環などが副葬された横穴式石室を主体部とする円墳１基・古墳時代墓壙１基・周溝状遺構１条・溝状遺構２条・土壙４基を検出している。よって、今回の調査は本調査として第三次の調査となった。

３　調査の方法と基本層序

調査区は、千葉市建設局道路部道路建設課作成の１/250スケールの境界点網図に記載されていた12の境界杭（公共旧国土座標系第Ⅳ軸Ｘ＝-47230.393・Ｙ＝30861.900）を基準杭とし、06杭（同軸Ｘ＝-47245.631・Ｙ＝30870.733）を視準して軸線とした。12杭から西に10mの位置に仮設した杭を１A-a杭とし、10m間隔で東西方向にアルファベットのA～Ｃ、南北方向にアラビア数字の１～３のラインを設定した。この10m角のグリッドを５m毎に四等分し、北東角の杭をａ区、東へｂ区、ａ区の南側をｃ区、その東側をｄ区として細分化している。なお、グリッドは先述の境界杭を基準線としたことから、真北から西へ30.5°軸線が振っている。標高は、境界点網図中のKBM-１（H＝37.554m）から調査区内に移設したBM（H＝36.402m）を基準としている。

基本層序は、第９図の土層図が基準である。Ⅰ層：7.5YR3/3暗褐色土の現代表土層。粘性もしまりも弱い。Ⅱ層：7.5YR2/2黒褐色土層。粘性弱く、しまりある。褐色土を斑文状に含む。Ⅲ層：7.5YR4/4褐色土層。粘性あり、しまりも良好である。暗褐色土を少し含む。Ⅳ層：ソフトローム層。なお、遺構覆土にローム粒や砂粒が含まれる点で上層堆積層と区別している。

４　検出された遺構と遺物

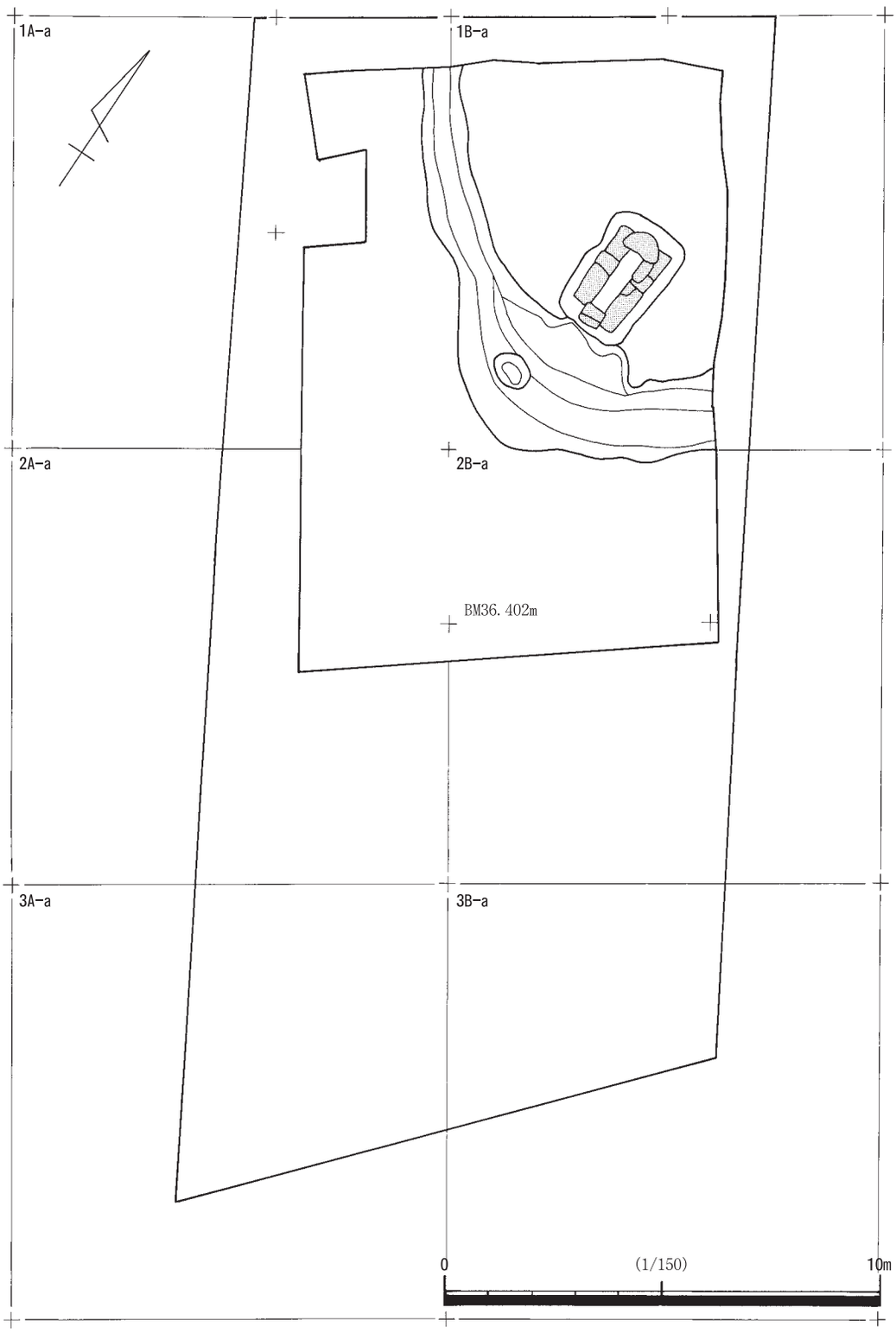
今回の調査で検出された遺構は、古墳時代後期の周溝を有する古墳とそれに伴う主体部が１基検出された。なお、平成４年度調査で検出された古墳を１号墳としたので、今回の古墳を２号墳とした。

ａ　古墳時代

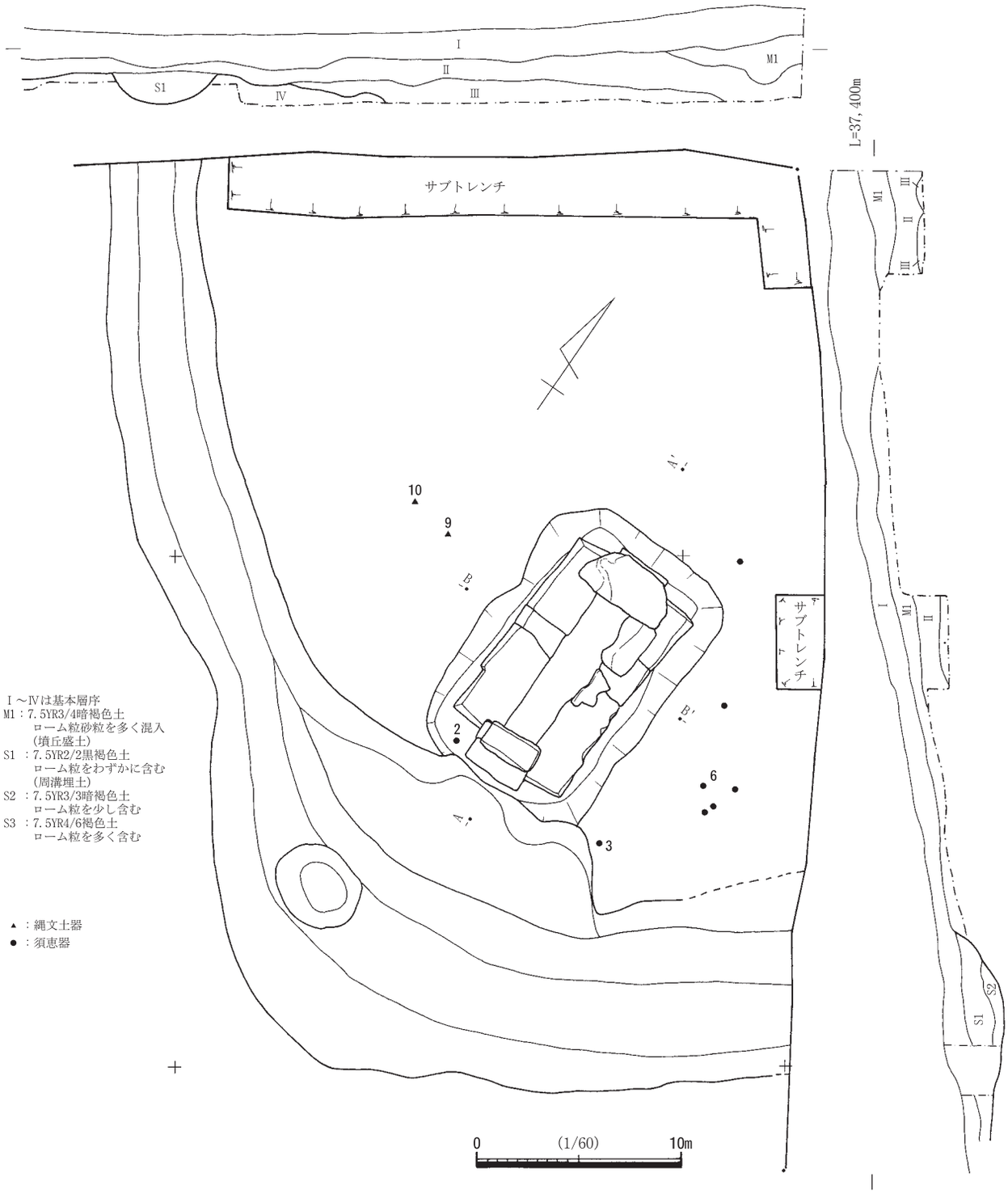
古墳

古墳は、土壙状の掘方内に構築された箱式石棺を主体部とし、全体の約２/５程の周溝が検出された。

周溝外縁部径は約18m、墳丘部径は約16m程度の規模と推定される。墳丘盛土は削平されていたので現況で視認することはできなかったが、断面土層図で厚み20cm前後の盛土を確認することができた。主体部主軸はN-0.5°-Eでほぼ南北軸に平行する。周溝幅は１～２m前後で、深さが0.3m前後を測る。

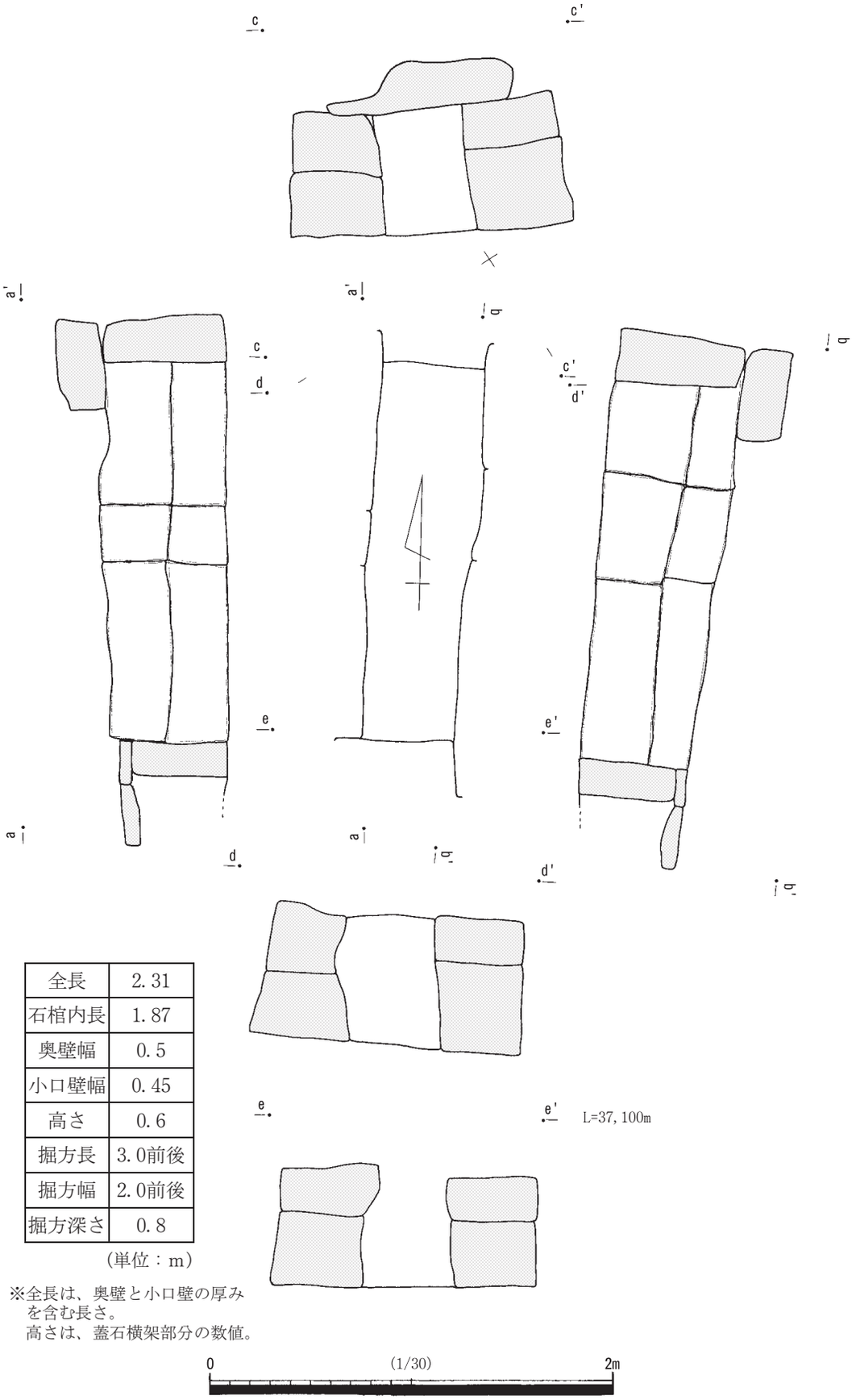


第８図　菱名台遺跡遺構配置図



第９図　菱名台遺跡２号墳平面図・土層断面図

主体部は、軟質砂岩の切石積みであった。東西壁はほぼ垂直に二段積みし、奥壁（北壁）と小口壁（南壁）を一枚板状に敷設している。残存する蓋石も切石で奥壁寄りの一石のみが横架した状況で検出されたが、小口壁寄りのものは主体部内に崩落した状態で検出された。なお、平面図上南側に前庭部が存在するかのような表現となっているが、横穴式石室との認識で調査を開始したための誤認であり、本来は土壙状の掘方であったと推定される。主体部の床面規模は長辺1.87m、短辺0.5m（奥壁）・0.45m（小口壁）、高さ（奥壁）0.6m、積石上端は南壁側がやや狭いが、床面規模とほぼ同規模となり持ち送り構造ではない。掘方は、上端部長辺３m前後、短辺２m前後、深さ0.8m前後、底面長辺約２m、短辺0.7m前後で逆台形状の断面形を呈している。

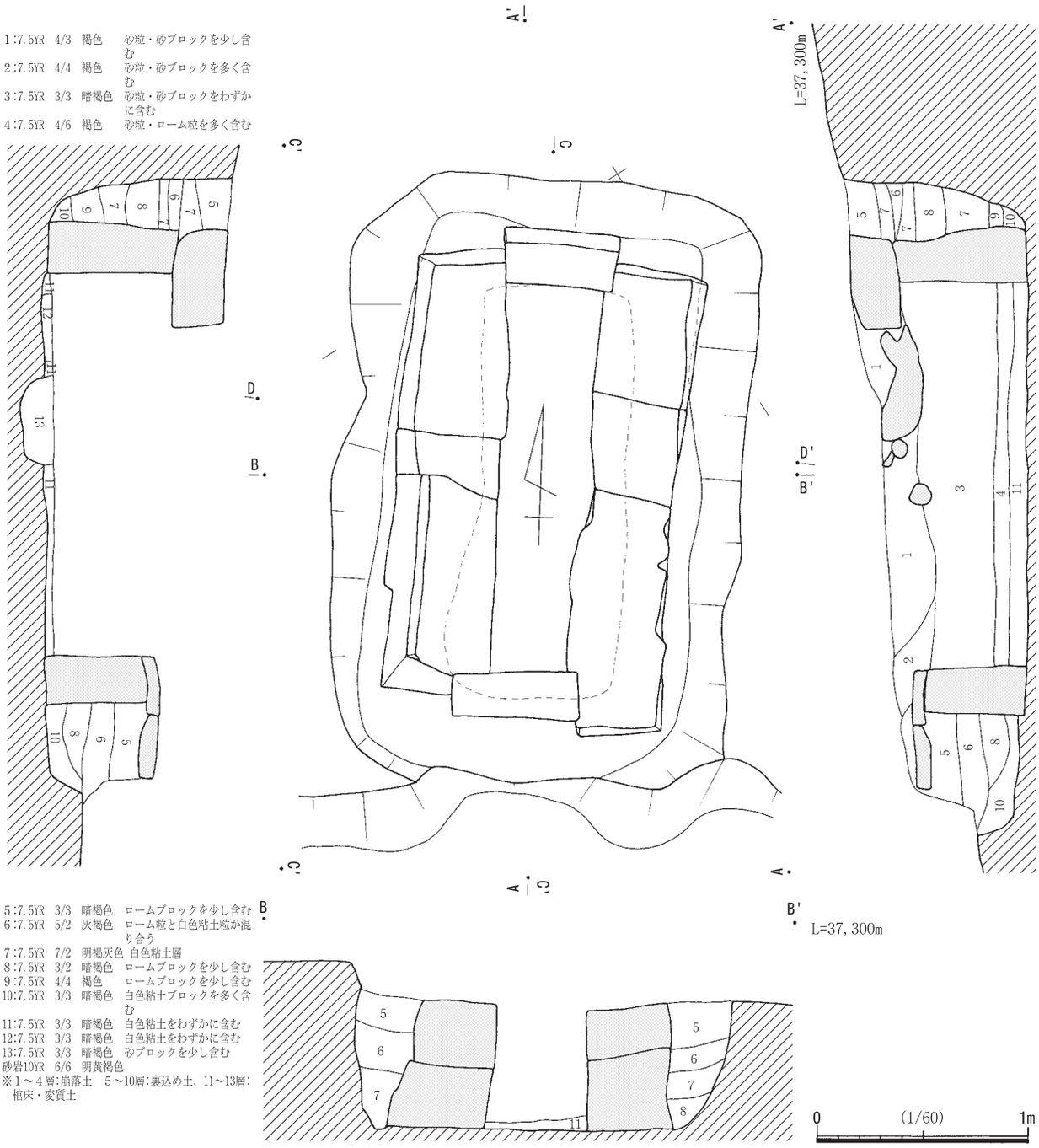


全長	2.31
石棺内長	1.87
奥壁幅	0.5
小口壁幅	0.45
高さ	0.6
掘方長	3.0前後
掘方幅	2.0前後
掘方深さ	0.8

（単位：m）

※全長は、奥壁と小口壁の厚みを含む長さ。
高さは、蓋石横架部分の数値。

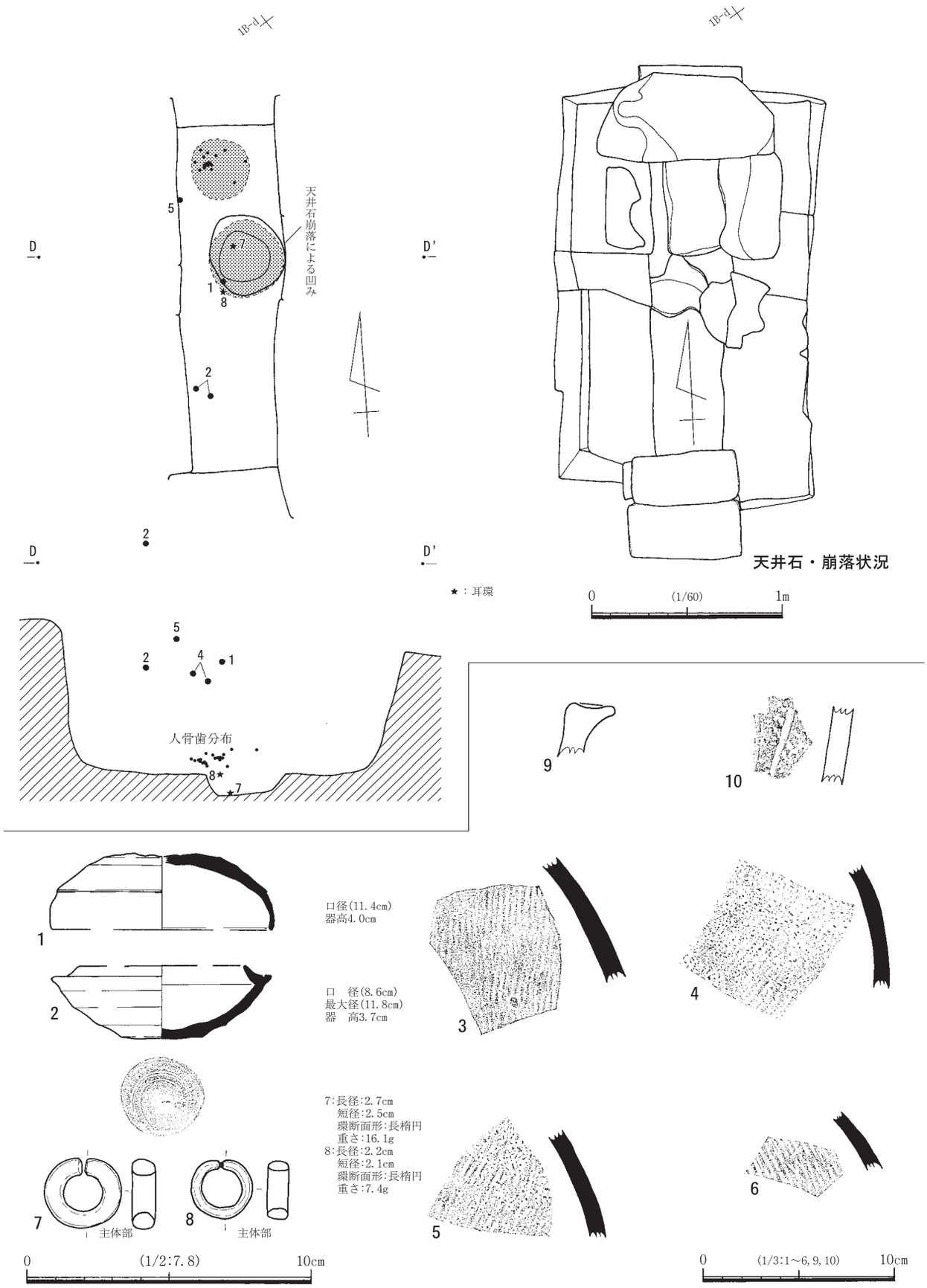
第10図　菱名台遺跡主体部石室展開図



第11図　菱名台遺跡２号墳主体部平面図・土層断面図

出土遺物は、主体部内・周溝覆土・古墳周辺に拡散して出土している。須恵器杯蓋・身（第12図－１・２）は主体部の内外から分散して出土している。共に口径と調整技法的に７世紀前半の特徴を見出すことができる。その他の大甕の破片（３～６）は、墳丘周辺で出土しており、主体部外に本来安置されていたものと想像される。金環（７・８）は主体部床面から出土しており、副葬品の一部と考えられる。被葬者の歯が散乱していた付近ではなく、崩落した天井石による凹みがある付近で出土していることから、耳飾りでないものか被葬者が複数人であった等の可能性も考慮すべきであろうが、それぞれ積極的に支持できるほどの根拠は得られなかった。

９と10の後期・堀之内式期の縄文土器は、古墳の墳丘下の包含層中から出土したものである。



第12図　菱名台遺跡２号墳主体部出土遺物及び天井石残存・崩落状況平面及び出土遺物

５　小　結

今回の調査では、現況で古墳を認知していなかった地点で古墳が検出された。しかし、調査対象区域が市道の道路幅分のみであったことから、古墳の2/3が未調査となってしまい古墳の全体像を把握するには至らなかった。調査対象域外に未調査の古墳周溝以外の遺構が展開するかは不明だが、周溝内埋葬などをする例も少なくないので、土壙などの遺構が存在する可能性は否定できない。主体部は、土壙状掘方内に箱式石棺を敷設したもので、主体部内上層から出土した須恵器杯蓋の年代観から７世紀前半頃には造営されていたと予測される。平成４年度調査で検出された古墳（１号墳）の主体部が南側に開口する横穴式石室だったことから、古墳群内でタイプの異なる古墳が併存していた可能性がある。ただし、未報告なので詳細な時期・構造などの検討がなされていないことから、時期差による形態変化の可能性もあろう。

Ⅲ　まとめ

この報告書では、荒屋敷西遺跡と菱名台遺跡の調査成果を報告しており、両遺跡とも今回調査以前に何回かの調査が実施されている。それらの調査成果をふまえた十分な検討を紙幅の関係上行えなかったことは課題といえよう。荒屋敷西遺跡の場合、平成14年度の調査における成果と若干の比較を行ったものの、前期の関山・黒浜式期の遺物がない点以外は傾向がある程度一致することや混貝土層の範囲が拡大するといった程度の成果しか得られなかった。周辺貝塚群の成果との比較も今後の課題である。

菱名台遺跡では、円墳とその周溝及び主体部である箱式石棺（小竪穴式石室？）が検出された。主体部内から金環が２点出土したが、床面から他の遺物が全く出土しなかったことから、明確に時期比定するには至らなかった。盗掘坑は未確認だが、遺物や蓋石の残存状況から盗掘されている可能性も考えられる。その場合、主体部覆土上層から出土している須恵器の杯は、主体部内から持ち出されたものである可能性もあろう。

おゆみ野地区では６世紀中頃から７世紀後半までの約100年間に200基以上の古墳が造墓され、横穴式石室や箱式石棺を主体部となす古墳も多く確認されている。これらの古墳は切石の軟質砂岩を構築材として利用するものが多く、７世紀中頃以降の造墓に横穴式石室、それ以前は箱式石棺が採用される場合が多いとの成果が報告されている。また、副葬品に武器の占める割合が高く、馬具・飾り太刀・弓の飾り金具・甲冑の小札等を副葬する群の中心的な古墳との間に格差がみられることもわかっている。菱名台遺跡周辺では、仁戸名遺跡の古墳群が前方後円墳を含み鉄刀・鉄剣・桂甲小札・刀子・鉄鏃などの武具類が豊富に出土している。また、平山支谷奥部の中原古墳群・塚原古墳群も前方後円墳を含み周囲とやや格差のある副葬品が出土しており、周辺古墳群中でもやや優位な立場を維持していた首長の古墳群のなのであろう。菱名台遺跡の１号墳は武具類がまとまって出土し、おゆみ野地区の古墳群の傾向と似ており、２号墳が箱式石棺、１号墳が横穴式石室を採用していることから２号墳の方が若干古い造墓であったと予測する。今後、１号墳の整理や別地域の調査された古墳を再整理・検討し、市内の古墳時代後期から終末期の古墳群の動態を把握することは重要な課題の一つであろう。

写　真　図　版

1 区（西から）

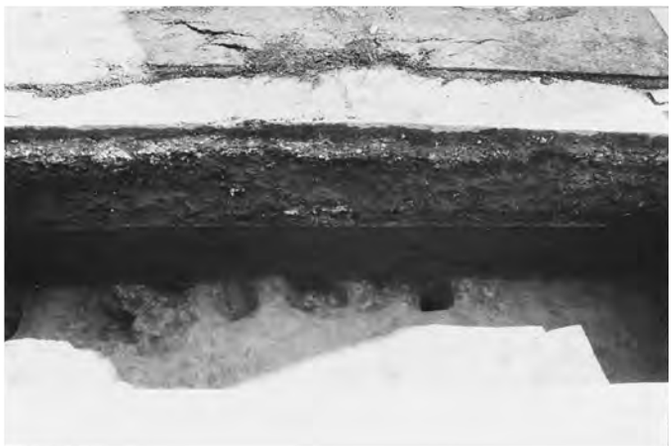
2 区（南から）

3 区（南から）

4 区（南から）

6 区（北から）

7 区（北から）



8 区（西から）

9 区（西から）

図版２

荒屋敷西遺跡

１号土壙①（西から）

１号土壙②（西から）

１号土壙③（西から）

９・10区（西から）

10～12区（北から）

10～12区（南から）

14区（北から）

15・16区（南から）

調査前全景

2 号墳石室天井石崩落状況

2 号石室全景（残存天井石有り）

2 号石室天井石残存状況

2 号墳全景①（南から）

2 号墳石室内遺物（歯）出土状況

2 号墳石室東西断面（西側）

2 号墳石室東西断面（東側）

図版４

菱名台遺跡

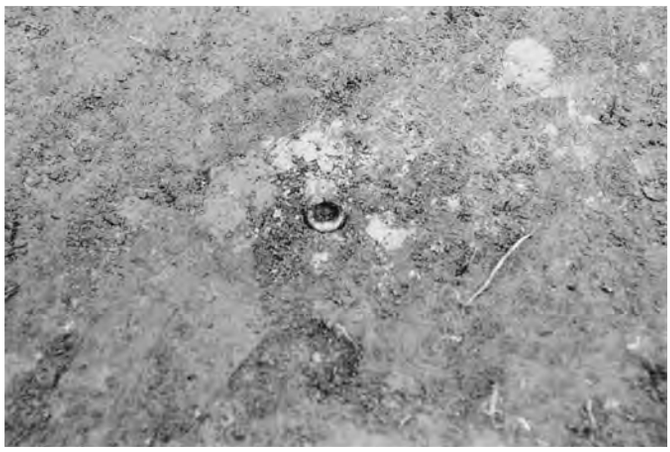
２号墳全景②（南から）

２号墳近景（南東から）

２号墳石室①（南から）

２号墳石室②（南東から）

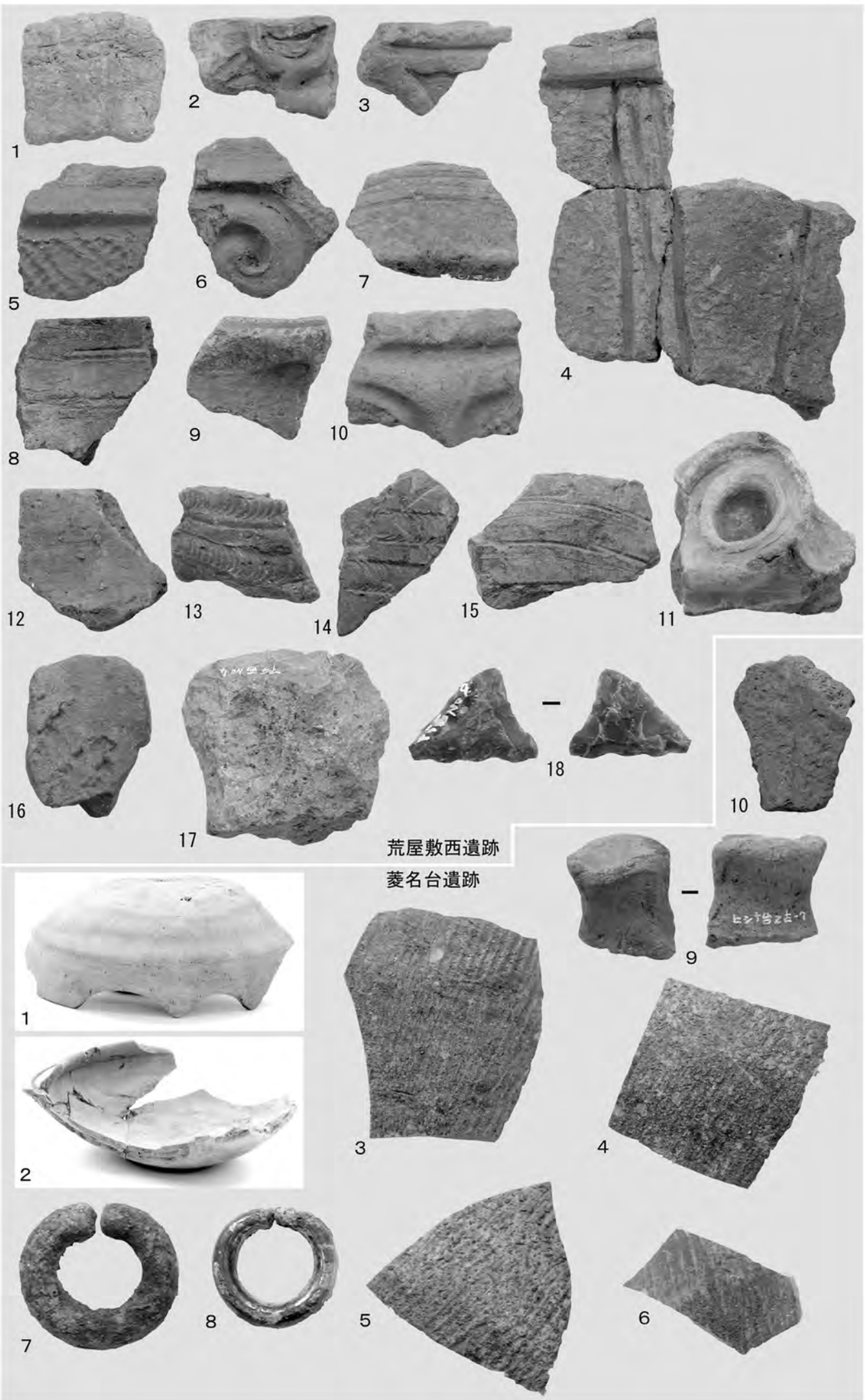
２号墳石室（東から）



２号墳石室内遺物（全環）出土状況

２号墳石室堀方（南から）

２号墳完堀状況（南から）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
10
荒屋敷西遺跡
菱名台遺跡
1
2
3
4
9
5
6
7
8

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ちばし　あらやしきにしいせき　ひしなだいいせき
書　　名	千葉市　荒屋敷西遺跡　菱名台遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	長原亘
編 集 機 関	財団法人千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒260-0814 千葉市中央区南生実町1210　TEL 043-266-5433
発 行 年 月 日	西暦2005年３月31日

所収遺跡名	地点名	所在地		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
荒屋敷西遺跡（あらやしきにしいせき）	千葉市若葉区貝塚町（ちばしわかばくかいづかちょう）828-1番地他	12104	若葉区78	35°37′09″	140°08′46″	20030317～20030327	24m²	公共下水道整備事業
						20030401～20030425	21m²	
菱名台遺跡（ひしなだいいせき）	千葉市緑区平山町（ちばしみどりくひらやまちょう）1921-16他	12104	緑区68	35°34′25″	140°10′25″	20030716～20030912	310m²	市道川戸町76号線整備事業
				(旧座標系)				

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特記事項
荒屋敷西遺跡	集落跡 貝塚	縄文時代	土壙　１基	縄文土器・石器・土製品	
		時期不明	ピット　23基 溝状遺構　１条		
菱名台遺跡	古墳	古墳時代後期	円墳(周溝・箱式石棺)　１基	須恵器・土師器 耳環・縄文土器	

－千葉市－

荒　屋　敷　西　遺　跡
菱　名　台　遺　跡

平成17年３月31日　発行

編集・発行　千 葉 市 教 育 委 員 会
千葉市中央区問屋町1-35
財団法人 千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町1210
TEL 043-266-5433

印　　刷　株式会社　多　田　印　刷
千葉市緑区古市場町474-252
TEL 043-268-2131